

研費・基盤研究 A

「天文学との連携にもとづく考古学・考古史学研究法の構築」
(19H00544)

七夕に関するフィールド調査

研究成果中間報告書

令和二年一月

今野利秋

第一章 調査の概要

1. 調査日程

調査は2019年7月から8月に三回に分けて行った。対象としては主に、「各地の七夕の行事」であるが、その旅程上のコースや目的地周辺にある「各地の天文史跡」も効率的にめぐり、一回の調査における成果をできるだけ多くなるように努めた。

(1) 7月6日、7日

大阪府枚方市・交野市、京都府京都市を調査した。

7月6日

- ・枚方市香里ヶ丘4丁目：牽牛石
- ・交野市星田7丁目：星の森
- ・交野市星田9丁目：星田妙見
- ・交野市星田1丁目：光林寺
- ・交野市倉治1丁目：機物神社
- ・京都市東山区下河原町526：高台寺

7月7日

- ・京都市上京区飛鳥井町261：白峯神宮

(2) 8月2日～4日

石川県金沢市・鳳珠郡穴水町・鳳珠郡能登町・珠洲市・鹿島郡中能登町を調査した。

8月2日

- ・金沢市泉野町3丁目：木村榮博士生誕の地碑
- ・鳳珠郡穴水町字根木：ボラ待ちやぐら
- ・鳳珠郡穴水町字新崎：ボラ待ちやぐら
- ・鳳珠郡穴水町字川島：ボラ待ちやぐら、同跡
- ・鳳珠郡穴水町根木地内：ボラ待ちやぐら

8月3日

- ・鳳珠郡能登町字羽根：弁天島
- ・珠洲市宝立町鶴飼：空海ゆかりの地の見附島
- ・珠洲市宝立町鶴飼：同の社
- ・珠洲市宝立町鶴飼：宝立七夕キリコ祭り

8月4日

- ・鳳珠郡穴水町字旭ヶ丘：ボラ待ちやぐら
- ・鳳珠郡穴水町字川島イ50：ローエル上陸の地
- ・鹿島郡中能登町芹川：荒山峠
- ・鹿島郡中能登町井田部10-1：道の駅 織姫の里なかのと

(3) 8月10日、11日

山形県東根市、天童市を調査した。

8月10日

- ・東根市本丸東3-1：東の杜
- ・東根市本町通～市役所前：東根動く七夕祭り

8月11日

- ・天童市小路1-8-16：佛向寺の満月之碑
- ・東根市中央南1-7-3：東根市図書館

2. 大阪府における調査の概要

(1) 調査エリア

- ・枚方市香里ヶ丘
- ・交野市星田
- ・交野市倉治

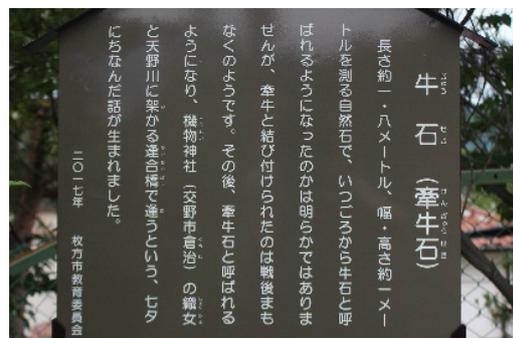
(2) 調査の結果

1) 七夕関係

調査エリアの枚方や交野一帯は、日本における七夕伝説の発祥の地であるといわれている。七夕のフィールド調査にあたり、今後の調査へのヒントが得られる可能性を期待して、行事や関係する場所を見て回った。

①牽牛石（枚方市香里ヶ丘4丁目）

観音山公園の一番高いところにある石で、大きさは長さが2mほどある。交野市の織物神社の織姫とセットになった逢瀬の伝承がある。伝承自体は戦後に誕生し、地域の活性化に活用されている。公園内には2007年の全国七夕サミットを記念した牽牛像が建てられている。



②機物神社（野市倉治1丁目）

大陸からの渡来人の中で、織物の技術を持った集団がこの地で一大勢力となり、祖先を祭っていた。平安時代に貴族が多く訪れるようになると、祭神が棚織姫に変えられてしまった。



③牽牛石と織物神社の位置関係

両者の間には地上の天の川としての川である「天野川」が流れており、天上における「織女星」「天の川」「牽牛星」の写し絵のようになっている。



2) 星降り伝説関連

七夕調査に合わせて、交野市の星田エリアにある「降星伝承」に関する場所を訪れた。平安時代初期、市の南側にある獅子窟寺に弘法大師がこもっていた時に、星田の三か所に北斗七星が降った。その三か所の距離がそれぞれ八丁（約 900m）離れてい

たので、「八丁三所（はっちょうさんところ）」と呼ばれるようになったという。

①星田妙見（交野市星田9丁目）

降星伝承のある場所の一つ。弘法大師の手で創建され、多くの武士から農民に至るまで信仰を集めたという。

七夕とのつながりも深く、妙見宮のホームページには「当宮は古くから伝統的な七夕祭祀が行われておりました。享和元年(1801)に刊行された『河内名所図絵』には「妙見祠 妙見山にあり。神躰巨石三箇、鼎の如く岐ちて、丘の如し。前に石の鳥井、拝殿、玉垣、石段あり、土人、織女石とも呼ぶ。」とあります。織女石とは七夕の織姫を祀る石ということですので」とある。



②星の森之宮（交野市星田7丁目）

降星伝承の地の一つ。落下したとされる石が祭られている。1991年にこの地を整備
祭め
個
神の



③光林寺（交野市星田1丁目）

降星伝承の地の一つ。境内には落下したとされる影向石が祭られている。





降_三伝承の三か所（八丁三所）の位置関係

（3）調査の成果

古くから渡来系の織物の技術を持った集団がすみ、平安時代には貴族たちに「交野ヶ原」として親しまれたこのエリア。日本における七夕発祥の地ということで、訪ねてみなくてはいけないと思っていた。

織物神社では、訪れた時に行われていた七夕まつり（7月6、7日開催）は、子供たちから高齢者まで、多くの地元の人たちが境内に集まっていた。願い事を短冊につるしたり、茅の輪くぐりをしたりと、無病息災への祈りを込めて、屋台の食べ物をほおぼりながら夏の夕暮れを思い思いに過ごしていた。これは地域における七夕伝承の地の中心的な場所として、コミュニティーの人々が交流をする場所としての役割を果たしていた。

牽牛石には特段、参詣の人がいたり、そこで何かが行われていることはなかった。同じ観音山公園にある牽牛像では、地域の方がちょうど七夕飾りをしているところであった。この石と織物神社を結び付けた七夕伝説は、戦後にできた新しいものであり、地域振興の手段として七夕を活用していることが目に見えてわかった。

当該エリアにおいて、古くから七夕の行事が行われていた星田妙見。こちらでもちょうど七夕まつり（7月7日開催）の飾り付けが行われていた。織物神社とは対照的に、訪れる人も少なかったが、印象的なのは山頂にまつられた「織姫岩」である。七夕が巨石信仰という形を取って伝わっているのは、珍しいのではないだろうか？ ただ、七夕信仰の一つの事例として、もう少し掘り下げて調べてみるには時間が足りなかった。成果としては、後述するように、今後のさらに詳細な調査を行う必要性を感じたところにあるといえる。

3. 京都府における調査の概要

(1) 調査エリア

- ・京都市東山区
- ・京都市上京区

(2) 調査の結果

京都における数多くの七夕関係の行事とイベントから、二か所の事例を調査した。

①高台寺の七夕（京都市東山区下河原町526）

高台寺は、豊臣秀吉の正室である北政所が晩年を過ごしたところであり、「ねねの寺」として知られる建仁寺派の寺院である。古くからの伝統行事ではなく、夏の夜間公開に合わせて行われているイベントであった。



②白峯神宮の精大明神祭「七夕祭」（京都市上京区飛鳥井町261）

白峯神宮の創建は1868年と近代である。神宮が建てられたのは和歌・蹴鞠の公卿宗家「飛鳥井家」の邸宅地跡であり、同家が代々守護神としてきたまた「まり」の守護神である「精大明神」が祀られている。七夕祭は精大明神が七夕の祭神であるとされていることに由来し、蹴鞠や小町をどりが奉納される。

・蹴鞠奉納

蹴鞠は中国から古来に伝えられたものとされ、宮中において長らく伝えられてきた七夕同様の宮廷の貴族文化であったが、明治維新以後に一旦途絶えた。1903年に保存会が結成され、七夕祭りの日に奉納をされている。蹴鞠の実演だけでなく、歴史や蹴鞠のルールなどが解説され、参詣者も参加ができる。



・小町をどり

もともとは、宮中における乞功奠の際に、公卿等が詠んだ和歌を届ける文使い（ふみづかい）のお供をしていた娘たちが、その道中で歌い舞った踊りが起源となっているという。その後、庶民の間で七夕の風習として広まり、この地域では西陣が近いこともあり、元禄の頃に西陣織の着物を着飾って、街々を歌い踊り歩いたのが始まりであるとされている。明治に途絶えたが昭和 37 年に復活し、神宮が毎年踊り手を公募している。



(3) 調査の成果

京都では、冷泉家における中国寄りの伝来の形式を残して伝えている伝統的な行事から、京の七夕のようなイベントまで多くの七夕が行われている。今回はその中から、伝統的な行事とイベントを各ひとつずつ調査することができた。

高台寺の七夕は、夏の夜間特別拝観に合わせて 7 月 6、7 日に行われている。境内に七夕飾りをしつらえて、夕涼みがてらに観光客が訪れていた。東山の高台にある高台寺からは景観も良く、京都盆地の夕暮れを愉しむこともできた。飾り以外に七夕にまつわる何かが特別に行われるわけではなく、どちらかというとな夜間拝観への入り口を飾る意味合いが強いように見受けられた。同寺のホームページや観光協会の情報からでは詳細がわからなかったが、イベント的な七夕と解釈して良いと思われる。

白峰神宮の七夕祭自体は、神宮の創建が明治元年と新しいこともあり、それほど過去にさかのぼるものではない。ただ、奉納されている蹴鞠も小町をどりも、貴族が宮中で長らく伝えてきた文化であり、七夕と同じ古さを持っている。いったん途絶えたものが復活されたものではあるが、伝来した頃の七夕に伴う行事のかたちの一端を見ることができた。こういった成果は京都ならではのものである。

4. 石川県における調査の概要

(1) 調査エリア

- ・金沢市泉野町
- ・鳳珠郡穴水町
- ・鳳珠郡能登町
- ・珠洲市宝立町
- ・鹿島郡中能登町

(2) 調査の結果

1) 七夕・天女伝説関連

調査のメインの対象を「七夕キリコ」とし、祭りの開始から終わりまでを見た。また、天女伝説が祭りに向かう途中にあることを知り、その伝承の地も訪ねた。

①宝立七夕キリコ祭り(珠洲市宝立町鵜飼)

七夕の七日盆に行われる祖霊迎えの行事の色を今に伝えている。1433年に市内の妙巖寺が現在地に建立されたことが起源とされている。キリコは切籠灯籠のことで、能登各地で夏から秋にかけて行われる祭りにおいて、神輿のお供として氏子たちが担いで練り歩く。宝立の場合は、そうした他の能登のキリコとは異なり、神社の行事とは関係なく、キリコが中心となったお祭りであるという独自性がある。

祭りが始まると、市内の各地区の大型のキリコ（高さがおよそ14mほど）6基と子供キリコ（およそ6m）1基）が動き出して夕暮れ時に一度集合し、鵜飼川沿いに一列に並ぶ。そのあと川を渡った鵜飼漁港にて乱舞をし、今度は海辺へと集合する。22時頃、花火を合図に海の中へとキリコを担ぎ出し、松明の周りをまわり乱舞をする。キリコが浜辺に引き上げられて、各々の地区へと帰りだすのは日が変わるころである。

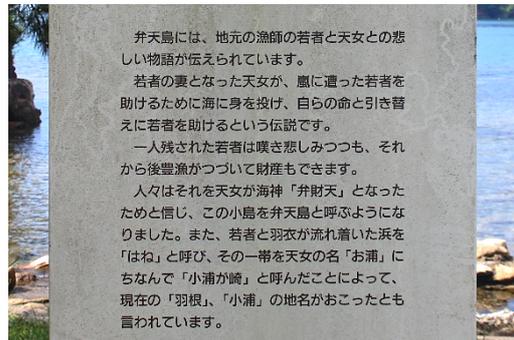
2018年までは8月7日に行われていたが、2019年から8月の第一土曜日に行われるように日程が変わった。



②天女伝説の地・弁天島(能登町宇羽根)

能登半島に天女の羽衣伝説の地があるということで、いつか訪問しようと思っていた。天女の羽衣伝説の中には、天の川由来として七夕に関わるものもあるからである。七夕キリコに行くルート上であることから今回立ち寄った。結果的には、七夕との関連性がないことが分かったが、実際に伝承の地を見て確認をするこちで得られることもあるので、無駄とは言えない。

ローカル雑誌(「能登」34号 2019年)に、「天女の羽衣 一能登町・田ノ浦海岸」という記事が掲載されており、伝承と、その伝承が地域の字名の由来になったと書かれていた。天女の「お浦」、羽衣が流れていた場所の「ハネ」という名前に、いつしか「小浦」「羽根」の字を当てようになったという。



2) 天文学史跡関連(木村榮、パーシバル・ローエル)

石川県を調査するというこちで、地域にある天文関連の史跡も合わせて訪問した。

①木村榮博士生誕の地碑(金沢市泉野町3丁目)

木村榮は、日本の天文学者で、訪問した2019年に開所120年を迎えた水沢緯度観測所の初代所長。恒星の動きを計測することで行う緯度観測の誤差を小さくする「Z項」を発見した。明治時代に日本の緯度計測を世界トップレベルにした。彼の生家は現在、銭湯となっており、名前の「Zささの湯」のZは「Z項」に由来する。記念碑は金沢市によるもの。



②ボラ待ち櫓(穴水町宇根木・他町内4か所)

やぐらの上で終日、ボラの群れを見張り、網をたぐるという原始的な漁法にかつて使われていた漁具。冥王星の存在を予言したことで知られるアメリカの天文学者パーシバル・ローエルは、明治に三回ほど訪日した知日派であった。能登を訪れた際の紀行文「能登・人に知られ日本の辺境」の中に、穴水へ立ち寄った際に見たボラ待ちやぐらを「怪鳥ロックの巣のようだ」

と記している。穴水調では、町おこしにローエルの足跡を活用している。

穴水町内には往時に 40 基を超えるやぐらがあったといい、現在、地図上では6基が記載されていたが、確認できたのは5基であった。町のシンボルとして、駅前の公民館にミニチュアがあったり、菓子屋のパッケージにデザインされるなどしている。



③ローエル上陸の地(穴水町字川島イ50)

パーシバル・ローエルが明治22年に和倉温泉から船でこの地に上陸したことを記念し、平成12年に地元の観光協会が設置したもの。穴水滞在の様子は「能登」の中に書かれている。この水辺の空間を生かした、カフェ・ローエルというイベントも、町おこしの一環である。



④荒山峠(中能登町芹川)

パーシバル・ローエルが能登に入った時に越えた峠。ここに記念看板があると、一部のホームページなどには記載があったが、現在は道がかけ替えられている。記念碑があった場所は旧道となり、荒れ果てて進むことができず今回は調査を断念した。冬枯れの時期などの機会があれば再挑戦したいと考えている。



3) 新たな発見があったもの

空海に関する伝承の地と、新たな天女伝説の地があることを発見した。

①) 空海ゆかりの地・見附島と社(珠洲市宝立町鵜飼)

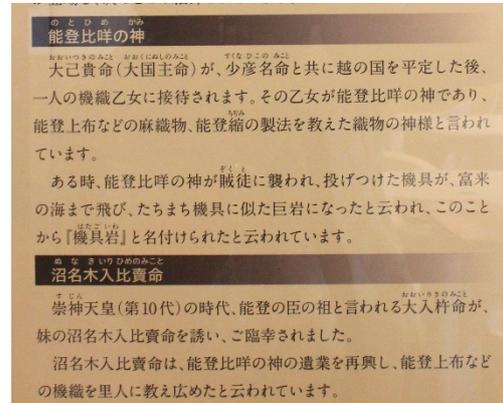
キリコ祭り訪問で偶然にも伝承があることを発見した。見附島前の海岸にある小さな祠横の「見附島と空海」の説明を要約すると、空海が日本に帰る時に、授かった密教の三杵(さんしよ)を奪われそうになり、日本の方へと投げた。空海が日本に帰国後、その三杵を探索していると、そのうちの1つ「五鈷杵(ごこしよ)」が空海創立の吼木山法住寺の桜の樹に載っているのを見つけ、「見附島」の名前の由来になったという。ほかの二つの経典は、佐渡と高野山の期の上に見つけることができた。弘法大師空海に関しては、交野市の星田のように(本報告書4-5頁)、ゆかりの地となる三か所に星が降ったという伝承がいくつか見受けられる。なぜ三か所であるのか、この経典の逸話に由来しているのかもかもしれないと思いつくが関連性は不明である。



②) 織姫伝説の地(中能登町に二か所)

荒山峠の昇り口近くから金沢へ戻る途中に、道の駅「織姫の里なかの」というのを発見し、織姫関連の伝承地が町内に二か所あるという情報を得る。能登部下区の能登比咩神社に織姫が祭神として登場するらしい。中国伝来の七夕の織姫ではなく、どうもこの地の伝統的な織物である能登上布の由来に関する、織物を織る神のようである。日本には織物産業が盛んな地には、そうした織姫がまつられている例があるので、その一つと思われるが、詳しい調査を

行ってみる必要があろう。もしかすると、日本古来からの棚機津女の伝承が中国伝来の七夕伝説の影響を受けずに残っている可能性も捨てきれないと思う。



(3) 調査の成果

七夕に関する伝統行事として訪ねた宝立七夕キリコ祭りは、開会式から終わりまでの一連を見ることができた。能登においてキリコは夏から秋にかけての祭りに欠かせないものであるが、この宝立地区のキリコだけが七夕の名を冠して行われている。しかし、詳細な調査を行えば、能登の数多くの他の地におけるキリコ祭りにも、七夕との関連性が認められる可能性がある。その場合、この地区の祭りの意味合いがそうであるように、星祭りの七夕ではなく、祖霊祭りと七夕が結びついているのかも調査の視点となろう。

道の駅において、中能登町に新たな織姫伝承の存在が分かったことも成果である。説明文を読む限りでは、訪問した能登町の弁天島の天の伝説同様に、七夕の織女との関連性は内容である。ただ、能登の地にいくつかの織姫伝承があるということは、今後の入念な調査によってはその数が増えていくことも考えられ、次につながる希望が見たことが大きい。

七夕だけでなく、訪問した地域にある天文史跡関連の調査も天文班の業務である。金沢市では、日本の近代天文学の黎明期において、世界的にその優秀さを知らしめた木村榮の生家跡にある記念碑を訪ねた。1870(明治 3)年に彼が生まれた泉町の生家跡は現在銭湯となっており、その店舗前に記念碑が建てられている。ほかにも郷土の偉人をたたえる「金沢ふるさと偉人館」や彼が青春を過ごした「第四高等中学校(現・石川四高記念文化交流館)など、市内の多くにその生涯を顕彰するものがある。市民にも広く親しまれている天文学者を通じて、日本の天文学がいかにして現在の最先端のものとなったのか、その一端が垣間見えた。石川県は天文学者、それも海外の天文学者にゆかりのある地でもある。アメリカの天文学者、パーシバル・ローエルは生涯に 3 度訪日するなど日本通であった。中でも能登地域に魅了され、東京から信州を経て、富山や石川などを紀行した時の印象を記した「NOTO」という書籍は、当時アメリカで辺境の地である東洋の国、日本を知ることができるものとしてベストセラーとなった。その中で、彼が特に目を引いたものとして「ボラ待ちやぐら」の記述がある。穴水町ではその伝統的な漁法が絶えて久しかったが、近年、ローエルを町興しに活用していることもあり、観光のための「ボラ待ちやぐら」が数か所に作られている。当時の生業の様子を知ることができるものとして貴重である。町内にはローエルが上陸した地やその海を見降ろせる丘に顕彰碑がある。一部を訪ねただけではあるが、事前に購入して読んでいた「NOTO」と合わせて、異国の地から来た天文学者の足跡をしるすことができた。

空海に関する伝承があることも期せずして発見できたことと、空から降ってきた經典の数が三

つであったということを知ることができたのも成果と言える。交野の降星伝承のように、各地の空海に関する星降りの数がどうして“3”であるのかを解くカギになるのかもしれない。

5. 山形県における調査の概要

(1) 調査エリア

- ・東根市本丸東
- ・東根市本町通～市役所前
- ・天童市小路

(2) 調査の結果

1) 七夕関連

東根市で行われた「ひがしね祭り」の「動く七夕提灯行列」を調査し、合わせて、市内の資料館や図書館にて関連資料を収集した。

①東の杜(東根市本丸東3-1)

(旧)東の杜資料館が改修されて、現在の施設となった。旧家の酒造を活用した歴史資料館には、「ひがしね祭り」のビデオと七夕について一枚のパネルが展示されている。ここで、夜の行われる提灯行列の様子を予習することができた。



東根七夕まつり行事

東根七夕まつりの特徴は田楽提灯を持って行列することで、「動く七夕」といわれる。江戸時代に、害虫を追い出すため松明をかがけて鉦や太鼓を打ち鳴らしながら田んぼを回る豊作祈願の「虫送り行事」が根源にある。明治時代に、旧暦七月六日の夜、棚竹という養蚕用の二間竹竿の先に田楽と呼ばれる提灯を門ごとに高く掲げ、先祖を向かえ祝う風習が各家々であった。子供たちは、やがてこの提灯を持ち出して「七夕様よ」と叫び、音が出るものを打ち鳴らしながら練り歩き始めた。これが七夕提灯の始まりともいう。明治17～18年頃のことである。また、雨乞いとして天の川に願いを託す目的で七夕提灯行列を行ったともいわれている。明治38年頃には、神社の太鼓を持ち出すなど、行列に様々な楽器演奏が伴ったという。このように東根七夕まつりの起源には諸説がある。

②動く七夕提灯行列(東根市本町通～市役所前)

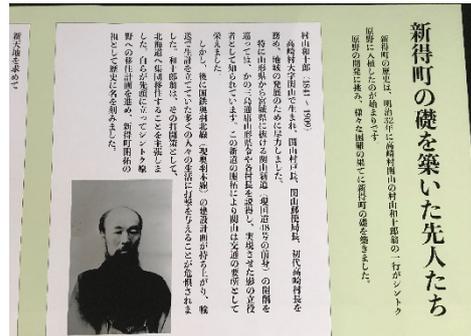
毎年8月10日の「ひがしね祭り」のメインの行事として行われている。18:30に提灯行列がスタート。2019年は51の団体が参加していた。21時から市内7地区の子供たちが扮した織姫と彦星によるステージショーが行われ、当日の祭りは幕を閉じる。七夕提灯行列は江戸末期から明治初期が起源とされる。七夕の夜に五穀豊穡(ほうじょう)や家内安全などの願い事を箱型の「田楽提灯」に書いて家に立てていたところ、子供が持ち出して歩き回ったのが始まりらしい。雨不足の折に雨ごいをしながら提灯行列をしたところ、雨が降ったという。1967年に一度行われなくなったが、地域の保存会が中心となって1972年に復活した。今は、お祭りの一環としての要素が濃いように見受けられた。提灯も願い事というよりは、流行りのアニメキャラクターがデザインされているものなどが多かった。



③東根市図書館(東根市中央南1-7-3)

「神町年中行事」(平成 22 年・神町地区年中行事あれこれ教室実行委員会)、「ひがしねの祭り・行事」(平成 25 年・東根の歴史と民俗を探る会／生涯学習東根地区会議)から、東根七夕に関する箇所を複写した。

当地から明治に北海道十勝管内の新得町に入植団があったとのことで、偶然にも新得町と東根市のつながりを示す特別展が行われていた。祭りにも同町から毎年来賓があるらしい。



2) 天文史跡関連

東根市でホテルが取れずに宿泊をした天童市にて、市内にある佛向寺の「満月之碑」を調査した。

○佛向寺の満月之碑(天童市小路1-8-16)

この寺は 1278 (弘安元) 年に時宗一向派の祖となった一向俊聖上人の開いた寺。石碑は、徳川慶喜が將軍職返上後謹慎した宝台院の住職である義誉上人が碑文をしたため建立した。当時の仏教的な宇宙観が記されており、調査日に偶然お会いした住職によると月への距離などが書かれているという。碑文の内容を読み下して研究をしたものが、山形大学か博物館にあるという。博物館友の会の会報には以下の抜粋があった

「…佛法之天学ニ志し激發スル人出来候儀も可有之哉寸情ニ御座候、右等之義ニ付、此節勘考候処数多の僧俗ニ為見候二者、中野より歟天童之方尚宜敷候哉共存附候、大通りと申末山も有之、殊陣屋も有之候得者、自然儒者抔も有之道理…」



(3) 調査の成果

動く七夕提灯行列は、100年余り続くという。ルーツは、地域の子供たちが五穀豊穡や家内安全を祈ったことに始まるという。北海道の「ろうそくもらい」との関連性は不明であるが、子供たちが手にする田楽提灯は、昔のねぶた祭りや、函館のろうそくもらいの提灯と形状がとても似通っている。また、囃子歌の「一年一度の七夕様よ 竹に短冊七夕様よ」は、函館のろうそくもらいのそれにととても似ていると感じた。行列が始まった時期を考慮すると、もしかすると山形県から北海道への入植移民が、この風習をもたらした可能性があるかもしれない。事実、明治には十勝管内の新得町へ、東根地域から多くの入植団があったらしいことが翌日、図書館に行ってみると分かった。偶然にも、NHKの朝の連続ドラマ「なつぞら」による十勝ブームもあって、ゆかりのある新得町についての特別展が行われていて、そのことがわかった。祭りにも、新得町からの来賓が毎年来ていたようだ。次につながる思わぬ糸口を見つけた次第である。

また、図書館での文献調査から、ホームページなどの限られた情報からはわからなかったことを知ることができた。「ひがしねの祭り・行事」には、動く七夕行列の諸説ある由来や、発刊現在までの祭りの変遷などが詳細に書かれており、祭りを見ただけではわからない背景を知ることができた。編集に携わった会の所在も明記されており、追加での調査が可能である。残念ながら、文献内には入植先への文化的な移入については記されていない。

天文学史としての佛向寺の満月之碑は、記されたのが1851、52年とペリーの来航の前の年である。当時は西洋の天文学の知識がすでに流布していたが、そうではなく、仏教の世界観を反映した月にまつわるサイエンスが記されているのが面白いところである。僧侶という知識層によるサイエンスが、当時、どの程度流布し、どの程度影響を持っていたのか？円通や佐田介石らによる、仏教天文学の研究事例は既にあるが、この山形の石碑も、日本の近代天文学の成立過程を調べる中での一つの具体的な事例となろう。

第二章 調査の位置づけ

日本各地には、七夕と結びついたり、冠としている行事やイベントが数多く存在し、また、ゆかりの地と称するところもある。そうしたものの実態は、実際にその場所を訪れて、目で見て肌で感じて体感することで見えてくることが多い。地域コミュニティにおける局所的、住民密着型、土着的な催しであるほど、その中に身を置くことでしかわからないことが多くあると考える。文献における調査では判明しない、そういったことを実施するのが、本「七夕のフィールド調査」である。今回の一連の調査は、この前提の流れの中で行っている。

(1) 大阪

七夕の調査にあたり、七夕発祥の地である枚方と交野は外すことのできない対象エリアであると考えた。平安の貴族たちが「交野ヶ原」と呼んで、七夕文化を醸成した地がいかなるところであるのか。実際に足を運んでみて、その伝承を構成している各要素が存在している地形や地理などを、歩いてみた。

(2) 京都

中国から伝播した七夕文化を最初に受容し、伝統的に行ってきたのが宮中の貴族である。彼らの文化や歴史が色濃く残っている土地、それが京都である。京都における七夕の調査の位置づけは、日本に入ってきたころの七夕、変容を遂げる前の原点としての七夕がどのようなものであるのかを探ることにある。同時に、近年では、商店街の七夕とは一線を画し、京都という地を活かした、七夕のイベントも行われている。伝来から 1300 年以上を過ぎて、時代とともに移り変わってきた七夕が、現代において人々にどのように受容され、関りを持っているのか。七夕の新しい局面を探ることも、京都での調査のもう一つの柱である。

(3) 石川

ねぶた、竿灯など、各地の大型な灯籠を伴うお盆の時期の行事は、七夕と関連することが多い。能登地域では夏から秋にかけて、切子灯籠が中心となるキリコ祭りが買いさされる。その中で、明確に七夕との関連性が祭りの名前に関係しているのが「宝立つ七夕キリコ祭り」である。ホームページなどから入手した限りでは、中国伝来の星祭りの七夕との関連性は見受けられておらず、日本に入ってきた七夕が各地の土着的な風習と結びついて形成された地域の七夕であるようだった。能登にある他のキリコ祭りに込められている願いや祭りの目的も、もしかすると地域の七夕系として、七夕との関連性を求めることができるのかもしれないとの思いを胸に、調査を行った。

(4) 山形

七夕の風習の地域性として、北海道の「ろうそくもらい」を次年度から本格的に調査を行う予定である。同様の行事が新潟県内で行われていることは知っており、「もしかすると日本海沿いには、北海道と本州との北前船による交易ルートとの兼ね合いや、明治期以降の入植移民の関連によって、ろうそくもらいにつながる風習の文化が北海道に

持ち込まれたのではないか」という仮説が長年、筆者にはあった。そういう観点で、日本海側の県の山形県の行事であり、かつ、子供たちの提灯行列が中心であるということで調査の対象とした。

第三章 調査の課題

初年度の調査を終えて見えてきた課題を、今回の調査で出てきたものと、今後何をすべきか、という二つに分けてまとめることにする。

1. 今回の調査で出た課題

(1) 大阪

日本における七夕発祥の地といわれる枚方と交野エリアを、当初は七夕行事やゆかりの地を中心に調査する予定であったが、思いのほか降星伝承に関する地を巡ることに時間を割いたこともあり、今回の少ない時間では十分に調査できていないのが正直なところである。また、実際に訪れてみると、星田妙見のさらに奥の山地には物部氏の祖先が天から降臨する際に乗っていた磐船、星が降った際に弘法大師がこもっていた岩屋などがある。星田の近くには私部という地名があり、枚方市には百済王に関する神社などがある。この地の七夕伝承のバックボーンに、特有な歴史的背景が確実に存在しているように思えてならない。そういった新たな、渡来人の文化との兼ね合いからの視点を持って、再調査する意義があると思われる。

(2) 京都

京都での調査は、第二章にも書いたように、「伝統と現代」の二本柱で行うことを目的としている。近年、各地において、商店街の七夕まつり以外の、現代における七夕のイベントの新しい潮流が起きてきているように筆者は感じている。その一つが「京の七夕」であるが、その種のイベントは誰でも観覧や参加が自由であり、調査が容易である。一方、伝統的な行事には立ちほだかる壁も多い。今回の白峯神宮のように、貴族の文化としての七夕文化のありようを、誰でも気軽に見ることができたのは、非常に貴重な機会であるといえる。ただ、乞功奠の兼ね合いでは、やはり、公家の流れを今に伝える冷泉家の七夕行事を、今回の科研の期間内において調査をする必要を強く感じた。白峰神宮における行事が七夕の周辺行事であるとすれば、冷泉家における行事は、その本質となるものであり、中国から伝来した七夕の原型を見ることができると思うのである。

(3) 石川

キリコ祭りの開会式から終わりまでの一連を見ることができたのであるが、集落を回ってみると、地区ごとの集会所や代表者の自宅と思われるガレージなどで、キリコを制作した残りと思われる材料(竹、縄など)が置かれているのを目にした。祭りの一連という意味では、キリコの組み立てから解体、担ぎ手が選ばれる過程など、祭りの工程の前後も調査をして、初めて祭りそのものを理解できるはずである。今回は、観光客的な立場でのうわべだけの調査にとどまっているという自覚があるのが問題点である。また、キリコ祭り七夕の結びつきの事例がこの珠洲市だけなのか、能登の他の地区にもあるのか、より広範な調査も望まれる。

天女伝説は直接七夕との関連は見出せなかったが、余呉湖や天橋立などの天女伝説との関連性がある可能性がある。また、今回の調査で情報を得た中能登町の織姫伝説のように、織物との関連性も考えられる。成果にも記したが、日本古来からの棚機津女の伝承が、各地の織姫伝承の基底にある可能性も捨てきれないと考えているので、この地域広範の織姫伝承の検証の

必要性を感じた。

天文史跡関連としては、石川県にゆかりのある木村榮博士と、アメリカのパーシバル・ローエルに関係する地を訪ねた。日本の近代天文学に影響を与えた二人の足跡を訪ねることで、日本における天文学の発展の歴史を今に伝える史跡を一部ではあるが記録することができた。同時に、荒山峠のように失われていく史跡があることに危機感も覚えた。藪草がなくなる冬の時期にでも荒山峠は再調査が必要である。歴史に足跡を残すのが人であり、その跡に史跡を作るのもまた人である。人の営みの中で史跡は生まれて、モノによっては忘れ去られては歴史のかなたに消えていくものもある。経年の中での継続調査も必要であろう。

(4) 山形

東根で行われていた提灯行列の起源が江戸末期から明治の初めころであることと、東根地域から明治期に北海道十勝管内の新得町への入植団があったことは、今回、現地を訪れてみて得た成果である。現地の図書館での文献では、この提灯行列と「ろうそくもらい」の関連性を示唆する内容を見つけることはできなかった。次年度以降の本格的な「ろうそくもらい」調査の課題として、その関連性を調べていくことにしたい。具体的には新得町や、その他の山形県（特に東根やその周辺エリア）からの道内への入植者が多い地域での七夕行事の調査ということになる。

青森のねぶたが、「ろうそくもらい」の起源としての研究はなされているが、東北の日本海側には、山形隣県の秋田県内にも、湯沢市の七夕絵どうろう祭り、能代市の役七夕（能代ねぶた流し）、同市の天空の不夜城など、提灯や灯籠を伴う七夕行事が存在しているし、新潟県内では、「ろうそくもらい」と同じ歌詞を伴った行事がある。それぞれの起源は異なっていたり、不明なところもあるようだが、それらの要素が一部でも北海道へもたらされていないかどうか。その他の日本海側での七夕祭りの現地調査を行う必要性を、山形県に足を運んで一層強く感じた。

佛向寺の満月之碑に関しては、山形大学か博物館にあるという碑文の内容を解読した研究成果を入手したい。こちらは、現地に行かずともリファレンスで済むかもしれない。

2. 今後の調査課題

(1) 各地の七夕の事例のフィールド調査の継続

1) 目的

七夕がもともと中国から日本に伝わった文化や風習であることは、誰の目にも明らかなどころである。それは長らく宮廷貴族の文化として、ごく限られた階層の人間が享受していた。そうした七夕は冷泉家に代表されるように、往時の形式が今に伝わっている。

だが各地に目を転じると、先人による調査等から庶民の七夕は、様相を異にする。商店街のイベント的な七夕を別にすれば、日本古来からのお盆の風習や夏越の祓、農耕儀礼などと結びついている事例が多くみられるのである。

もともと、星祭りや乞功奠の要素を持っていた七夕が、庶民に浸透していく中で、各地にみられるような事例に変容をしていったことは明らかである。そうした、日本に伝播した七夕がいかに受容され、時とともに日本独自のかたちに変遷していったのか。すでに歴史の彼方に埋もれてしまった行事を検証していくのは実際、不可能である。そこで、現代行われている各地の七夕の伝統行事を調査することで、その片鱗をすこしでも明らかにすることを目的とする。

2) 調査の対象候補案

現時点では、上記に設けた課題から、以下のものを調査対象の候補とする。共同研究者と精査を重ねて、年度末までに調査対象を確定するものとする。

①宮廷文化系

中国から伝来した当時の七夕の形式を今に伝えるのが宮廷系の七夕行事である。日本での変容を遂げる前の七夕のあり様を知るために役立つと考える。

ー冷泉家の七夕（京都府京都市の冷泉家・旧暦7月7日）

宮廷文化系の代表である。非公開であり、冷泉家の関係者以外は見ることができないので、調査目的ということでの申請や手続きなどが必要となる。また、儀礼の詳細を記録し、多くの視点で見るために、筆者以外に複数名での調査を希望する。

ー金刀比羅宮の七夕鞠（香川県琴平町の金刀比羅宮・新暦7月7日）

江戸時代まで行われていた七夕に奉納する蹴鞠。明治になって廃れ、昭和7年に再興された。昭和49年、香川県の無形文化財に指定されている。

②庶民の七夕系ー盆行事や農耕儀礼などとの結びつきを中心に

これまでの多くの先行研究によって、日本各地域の七夕の多くが、盛夏からお盆にかけての土着的な風習と融合しているものが多いことがわかっている。伝来した異文化としての七夕文化が、人々に受け入れられる中でいかに変容を遂げて今に至っているのか、その具体例を調べるためにも、これまで筆者が訪れたことのない、各地の七夕行事をこの機会に調査しておきたい。

ー陸前高田の動く七夕祭り（岩手県陸前高田市・8月7日）

町内の12ある祭り組みによる山車がでて、囃子に合わせ勇壮に町を練り歩く。夜になると山車の飾りも変わって灯がともる。ねぶた系統？の七夕祭り。

ー藤塚浜の七夕祭り（新潟県新発田市藤塚浜・8月12日）

子供たちが木製屋形船を引き回す。七夕太鼓を打ち鳴らし、「タナバタサーマ マタライネンゴザレ」と歌いながら船を引く。夜にその船を海へ流す。

ー姫路の七夕紙衣（兵庫県姫路市の播磨灘沿岸の地域・8月6、7日）

初七夕の子どもを祝い、2本の笹竹に紙衣を通した細竹を渡して飾る。6日に人形を飾り、翌日になると笹竹は海に流す（現在は流さず回収する）が、紙衣は保存し翌年も使う。

ー大東七夕祭り（島根県雲南市大東町・8月6日）

短冊と提灯をつけた笹竹を手に、「さーい さーい さいさい てんてこさんの

七

夕さん てんてこさんの七夕さん 七夕さんを送くーわ 七夕さんを送くーわ」と歌いながら、各地区で作る大提灯や山車とともに町内を練り歩く。

ー久見の星祭り（島根県隠岐郡五箇村久見・8月7日）

星形のアンドンに、ろうそくの火を灯して村のなかを回る。翌朝、もう一度村回りをしてから、破損したアンドンや供え物の残りが海上に流される。虫送りの要素

も認められるという。

ー山口七夕ちょうちんまつり（山口県山口市・8月6、7日）

およそ 10 万個の提灯が市内に飾られる。室町時代の大内氏の盆提灯にルーツがあるという伝説もあるらしい。

ー八幡古表神社の乾衣祭（おいろかし）（福岡県吉富町・8月6、7日）

「細男（くわしお）の舞」で舞をする傀儡子が身につける衣装を虫干しする行事。約 1000 着の衣装が社殿内で何段にも組まれた物干し棹に掛けられ虫干しされる

ーナヌカソーロン（沖縄県内八重山各地 旧暦の8月7日）

七夕が、祖霊をむかえるための準備の日として明確に位置づけられている。親族が墓に集って掃除をして、宴を開くという。

（2）北海道における「ろうそくもらい」の源流を探る

各地の特色的な七夕の中で、北海道の「ろうそくもらい」を大きなテーマとして別枠を設けての調査対象としたい。

1) 「ろうそくもらい」とは？

七夕の夜に、地域の子供たち複数名がグループとなって手に明かりをもち、近所の家々を訪ねてはやし歌を歌ってろうそくをもらう風習である。行われている地域は道内全域ではなく、全道的にまだら模様になっている。日にちは函館では新暦7月7日、その他では月遅れの8月7日である。はやし歌も差異が認められている。同様の事例は秋田県や新潟県に認められている程度であり、北海道に特徴的な七夕の風習である。

2) 調査の目的

各地の七夕の事例は類例がその他の地域でも広く認められるのに対して、「ろうそくもらい」は北海道に限定的である。先行研究によれば、古くは青森のねぶたから派生したものであり、それが道内に伝播していく中で、ねぶたのもともとの行事が忘れられ、子供たちの「ろうそくもらい」だけが広まったとしている。だが、新潟県や秋田県に類似例があることはどのように考えればよいのだろうか？開拓期以降に、多くの人が本州各地から道内にやってきて、モノや文化、風習ももたらされた。「ろうそくもらい」も新潟や秋田を経てやってきている、と考えることもできるし、先行研究では逆に北海道からこれらの地域にもたらされた可能性も否定できないとある。場合によっては、青森のねぶたから分離して北海道に北上しただけでなく、周囲の秋田や新潟へと広がっていった可能性もあるのだろう。

本調査では、「ろうそくもらい」という独特の七夕の風習がなぜ、北海道にあるのか、その理由を探っていきたい。合わせて、現在、他県に存在する類似の風習との関連性についても調査を行いたい。

伝来以来 1000 年以上の時の中で変容した七夕。それが北海道という局所的なエリアで特徴的な風習を形成した。その過程がすこしでも調査で探ることができれば、文化の受容とその解釈や変容が如何におこなわれるか、七夕というフィルターを通して一つの事例になればと思う。

3) 調査の実際

①北海道での「ろうそくもらい」のフィールド調査

- － 1：函館 7月7日
残り三年間で毎年行うのか函館市内の三か所で行うかは年度末までに検証。
- － 2：道内① 行われているのが確実なエリア 8月7日
- － 3：道内② 文献で歴史的に行われていたエリアの現状
上記の①②のエリアについては対象をどこにするか年度末までに検証。

②日本海岸での七夕や起源とされるねぶたの調査

- － 1：ねぶた祭（青森市・例年8月）
- － 2：村松浜の七夕まつり（新潟県中条町村松浜・8月7日）
- － 3：秋田県の「七夕様のおくねりだ ローソク一本ちょうだい」の調査
「北海道の年中行事」小田嶋雅子著に記載があるが場所が不明である。
- － 4：その他 能代市の役七夕（能代ねぶた流し 能代市・8月6、7日）
同市の天空の不夜城（能代市・8月の第一土曜、日曜）

③文献調査・リファレンス

- － 1：道内の図書館・博物館・研究機関など
どこを対象とするかは年度末までに検証をする。
- － 2：北海道新聞のデータベース活用（有料）
現在どの地域で行われているかの実態を、新聞記事を通じて情報収集する。

4) 調査の項目

①行事の時間軸

- － 1：当日までの準備段階（買い物、明かり、順番、担当の家…）
- － 2：当日の時間軸（集合、開始、終了…）
- － 3：終わった後（もらったものの行方、後片付け、来年の当番…）

②行事の行われる空間（行動範囲、他の子どもたちとの住み分け、…）

③行事に関わる人

- － 1：子供（行事の主体、行事の継承）
- － 2：大人（子供を受け入れる側、行事の伝承）

④コミュニティーの地域性

- － 1：歴史的背景（入植元の都府県、統廃合、他地域との交流…）
- － 2：空間的背景（人口規模・密度、地理、生業…）

⑤時代的変遷

(3) 各地の七夕の文献での調査やレファレンス

七夕のフィールドにおける調査はその性格上期間が限られてくることは先述した。行事のフィールド調査を行う以外の期間は、文献やインターネットを活用した事例の調査が有効であると考えられる。具体的には以下の手段が挙げられる。

- 1) 各地の図書館・博物館・資料館・大学など研究機関に足を運んで、そこが所有する文献や資料や記録を調査する。
- 2) 同上に電話やメールなどで事例についてのレファレンスを行う。
- 3) インターネットを活用し、同上の文献や資料などの検索と収集を行う。

(4) 調査のスケジュール計画上の問題

七夕行事が行われる時期は大きく分けると、新暦の7月7日前後、旧暦の7月7日前後、月遅れの8月7日前後であり、調査対象のほとんどがこの期間に多く集中する。これは、調査の期間が限定されており、調査可能な対象が非常に限られてくることを意味する。七夕行事という性格上これは仕方のないことであり、残りの三年間の中で、効率よく、事例の調査を臨機応変に行うことが求められてくる。

そこで、それぞれが調査期間である向こう3年間に何曜日であるのかを調べてみた。行事が重なるということに加えて、自分が平日には調査を行う時間がなかなか取れないこともある。特に函館のろうそくもらいが行われる新暦の7月7日がいずれも平日であり、新たな調査協力者を立てての連携が必要である。今後、研究協力者と相談の上で、予定を組み立てていきたい。

①2020年

－7月7日（火）

－8月7日（金）、8日（土）、9日（日） 1日（土）、2日（日）

－旧暦 8月25日（火）

②2021年

－7月7日（水）

－8月7日（土） 8日（日） 31日（土） 1日（日）

－旧暦 8月14日（土）、15日（日）

③2022年

－7月7日（木）

－8月7日（日） 6日（土）

－旧暦 8月4日（木）

以上